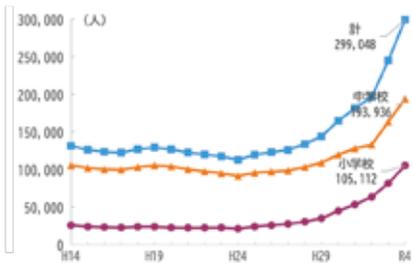
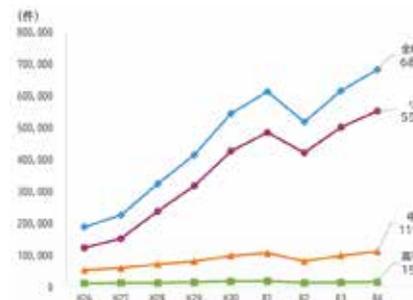


【図1】不登校児童生徒数の推移



【図2】いじめの認知件数の推移



出典：文部科学省「令和4年度 児童生徒の問題行動・不登校等 生徒指導上の諸課題に関する調査結果の概要」

2023年10月4日、文部科学省はその前年に全国の国公私立学校などを対象に実施した「児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査」の結果を公表した。暴力行為やいじめ、自殺などの項目ごとに現状を調べて指導に生かすため毎年実施されている調査結果の中で注目されたのは、「不登校」と「いじめ」が大幅に増加していたことだ。

まず病気や経済的理由などとは異なる要因により30日以上登校せず「不登校」と判断された小中学生は、前年度比22・1%（5万4108人）増の29万9048人（図1参照）となり、過去最多を更新した。これまでも不登校と判断された小中学生の数は10年連続で増加しているが、特に近年の増加率は顕著となっている。また、不登校になった要因としては「無気力、不安」（51・8%）「生活リズムの乱れ、あそび、非行」（11・4%）「友人関係の問題」（9・2%）がトップ3となっていた。

一方で、小・中・高等学校および特別支援学校における「いじめ」の認知件数は68万1948件（図2参照）で、前年度に比べて6万6597件（10・8%）増加。この中で、生命や心身などに重大な被害が生じた疑いがあったり、長期

いじめの認知件数は、  
前年比10%増の約68万件

## 小中学生の「不登校児」 過去最多を更新！

# 約30万人

### 【参照】

- ・児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査（文部科学省）  
[https://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/seitoshidou/1302902.htm](https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/seitoshidou/1302902.htm)
- ・令和2年度不登校児童生徒の実態調査結果の概要（文部科学省）  
[https://www.mext.go.jp/content/20211006-mxt\\_jidou02-000018318-2.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20211006-mxt_jidou02-000018318-2.pdf)

- ・不登校原因を文科省が調査したら「いじめ」わずか0.3%（東京新聞 2023/10/19）  
<https://www.tokyo-np.co.jp/article/284570>
- ・不登校要因、学校と子どもの認識に大差「いじめ」見逃しの恐れ（毎日新聞 2024/3/25）  
<https://mainichi.jp/articles/20240325/k00/00m/100/231000c>

欠席を余儀なくされたりするいじめの「重大事態」の発生件数は30・7%増の923件（前年度706件）で過去最多だった。

いじめの態様別では「冷やかしゃからかい、悪口や脅し文句、嫌なことを言われる」が57・4%と最も多く、「軽くぶつかられたり、遊ぶふりをしてたたかれたり、蹴られたりする」（23・4%）「仲間はずれ、集団による無視をされる」（11・7%）が続いた。

**不登校になったきっかけは、  
学校と本人に認識差**

「不登校」と「いじめ」の相関関係はあるのだろうか？ 文科省の「問題行動・不登校調査」によると、不登校の要因がいじめだったという、小中学生は全体の0・2%に過ぎなかった。しかしながら、同省が21年に公表した「不登校児童生徒の実態調査」では「友達のこと（いやがらせや、いじめがあった）」が学校に行きづらいつと感じるきっかけになったという小中学生は25%に及んでいるのだ。

なぜ両調査の結果はこれほどかけ離れているのだろうか？ その理由は、「問題行動・不登校調査」は教員や教育委員会が回答し、「不登校児童生徒の実態調査」は不登校を経験した小中学生や保護者が回答していることにある。もちろん両調査はサンプル数が異なり、単純比較はできないが、いじめに対する学校と子どもの認識に大きな隔たりがあることは問題だ。いじめが絡んで起きた不登校の多くを教員がスルーしている可能性があるからだ。

文科省も、このあたりの事情は認識しているようで、一人一人の児童生徒が不登校となった要因を分析・把握できるように、次年度は調査方法を見直す方針だという。次回の調査ではより実態に合った結果が出ることを期待したい。